

男性学の起源とカリキュラムへの示唆

Sam Femiano

訳者: 横田啓子

1 男性学の歴史と発展

1970年代の中頃、男性学はアメリカの数カ所で教えられていたが、男性学が、1つの区別される学問領域として認識され始めたのは、1980年代初めになってからである。1984年の全国調査によると、アメリカでは40講座が教えられていた。それから7年間のうちに、この分野は急成長し、現在アメリカの大学で教えられている男性学の講座は400ほどになった。

「男性学」という言葉は、メイルネス (maleness) とマスキュリニティー (masculinity) の概念を取り扱うことを共通の要素として、アメリカとカナダの大学でこの20年間に発展した様々な講座の多様性を表している。そして、男性心理の発達過程、社会における男の性役割、歴史と文学作品におけるマスキュリニティーの概念の変化等を取り扱っている。ある意味では、「男性学」という言葉は女性学と同じ起源を持ち、男性学の初期の発展においてはフェミニズムと女性学の影響は重要であった。しかしながら、原則的に、男性学の講座は、男の運動の発生、男の役割に対する社会概念の変化、さらにこれらの社会変化に反応して自分の生活を変え始めた男たちのイニシアティブから生まれてきたものである。

男性学の初期の発展のきっかけになったことの1つに、1970年代の初期に現われた男の運動がある。この時期は、男の性役割の規則が、自分自身の生活と社会全般に影響を与えていることを意識、認識し始めてきた時期として特徴づけられる。意識高揚のためのグループが国中に現われ、地方や地域のミニコミ誌が発行され、男性情報セン

本論文は、Dwight Moore & Fred Leafgren 編集の『Men in Conflict』(American Association for Counseling and Development, 1990) に掲載された“The Origins of Men’s Studies and Suggestions for a Curriculum”を許可を得て邦訳したものである(一部分は要約して翻訳)。サム・フェミアノはマサチューセッツ州ノーザンプトン市で特に男のためのカウンセリングを行い、男性学についての論文を発表。また、同市にある「The American Men’s Studies Association」の代表者でもある。

よこたけいこは、マサチューセッツ州のアムハースト大学アジア言語文明学科の日本語専任講師であり、5大学東アジア研究センター日本文化顧問。

ターも開かれた。運動の第1段階の主な特徴は、近代社会において、男であることの現実について男たちの側の自己意識が成長したことである。

この新しい自己意識から、次第に「歴史の新しい解釈」の必要性が生まれてきた。男たちは、マスキュリニティーの現在の概念が、歴史的にどのように創られてきたのか知りたいと考えた。つまり、個人の内面的な過程である自己意識の成長から、外的な過程である歴史的な意味の探求へと、男の運動は次の段階へ移行し、1970年代の後半には史的著作が現われ始めた。(Dubbert, 1979; Filene, 1974; Katz, 1976; Pleck & Pleck, 1980)。歴史的探求は運動の第2段階の特徴といえる。

第3段階は概念化の段階で、「男性学」が、男と男の性役割をより深く哲学的に理解しようとする男の運動の重要部分になっている。ここでも、女性運動の中で女性学の研究者たちが長い間かけて女性研究を学問体系化してきたが、男性学も同じパターンをたどっている。例えば、1979年の「全国女性学協会」の学会では、大学でのカリキュラムにおける女性学の役割と方法論の発展における問題点を取り上げた『女性学理論』という論文集を出した。男性学の分野では、そのような問題点は現在検討されているところである。

男性学の初期の講座は、国内各地の大学で様々な学部の中で教えられた。これら多くの教師は、個人的生活の出来事を通して社会における男の役割を考え直し、男性学の講座を始めた。彼らは研究者として、独自の学問分野のレンズを通してこれらの出来事を検討し、理解しようとするのは当然だと考えたのである。結果的には、男性学の講座が様々な分野にまたがって広がることになった。男性学の全国的な組織は1984年になるまではできず、講座を作ったほとんどの人は、それぞれ独立して行っていた。個人的関心と学究的な興味の両方から講座が作られていったこの過程は、女性学の講座の発展パターンを引き継いでいる。

過去数年の間に、男性学の講座は飛躍的に増加したが、おもしろいことに、当初の多様性は残り、今でも大学の非常に異なるいろいろな学部に存在している。講座開設の動機は今も意識高揚であるが、最近では研究の部分も増え、この研究の強化が5年前と最も違う要素である。男性学分野の研究は広まり、現在では論文が定期的に学術雑誌に掲載され、論文集も出版され、博士論文もひんばんに執筆されている。今日、男性学の学者や研究者をつなぐ全国的組織の「アメリカ男性学会」があり、男性学の論文や、書評、研究課題、文献を掲載する季刊誌『男性学レビュー』が発行されている。

このように講座や興味の拡散にもかかわらず、大学のカリキュラムの中の男性学の位置づけは、いまだに明確に定まっていない。アメリカとカナダの大学には、独立した「男性学のプログラム」はどこにも存在しない。ほとんどの講座はすでに存在している

学部の中で、あるいは複数学科にまたがって総合的に教えられている。男性学が最終的に落ち着くには、この分野がさらに発展することを待たなければならないようである。しかし、男性学が1つの学問分野であるという意見は適切である。

2 男性学のカリキュラム

男性学のカリキュラムを作成するためには、次のテーマが含まれなければならない。社会的に構築されたジェンダー（性）の概念と、それが男性心理発達に与える影響、男の性役割と行動、男の社会化過程における社会的組織の役割、マスキュリニティーの概念の歴史的变化、である。男の私生活と社会関係、特に男と被抑圧グループとの関係における力と支配の役割、現代社会で男の態度と役割がどう変化していくか、についても考察される必要がある。

2.1 男性学カリキュラムの目的

男性学の目的の第1は、メイルネスとマスキュリニティーの概念を心理学、歴史学、社会学、他の社会科学を通して定義することである。この目的は他の2つの目的を達成するための必須条件である。第2は、歴史のおよび現代社会における男の性役割の変化を理解することである。第3は、性役割の影響、とりわけ、男の性役割がどう自分たちの人生と社会に影響しているか、学生の中に新しい意識を育成することである。

第1の目的は、長年にわたって男性に帰属していた様々な特徴を探求し、理解することである。メイルネスが、普通、男の生得的な特徴と見なされているのに対して、マスキュリニティーは、歴史の中で発達してきた文化的に定義された男の特徴とされている。歴史的時代や文化の中で、異なる多様性を強調するために「マスキュリニティーズ」と複数形を使うことすらある。

メイルネスの歴史的、文化的多様性を理解することは2つの理由から必要である。もし男性についての適切な心理学が発達すれば、研究者たちは男性に生来的と思われる側面と、変化する可能性のある側面とを区別できるに違いない。さらに、男の性役割を変え、そこから抜け出せるか否かは、これらの役割が生得の特徴か、それとも学習されたものに基づいているか、にかかってくる。生物学的区別が、男性役割の正当化にしばしば使われてきたので、ジェンダー属性における生物学的要素と環境的要素の関係を理解することが、この目的の一部である。

男女それぞれへの性役割のふり分けを決めてきたのは、社会の性役割に対する考え方である。そこで、第2の目的は、マスキュリニティーの概念が男の性役割の変化にどのように影響を与えたかを理解することである。しかしながら、社会学者や人類学者、

他の社会科学者たちがこの視点から男の性役割を研究し始めたのは、つい最近のことである。デイビッドとブランソン (David & Brannon, 1976) は、次のようにコメントした。「この性役割の影響の下で成長したすべての人の知識や考え、そして態度に与えた測り知れない広範な影響のために、むしろ、かえって、男の性役割は科学的研究を逃れてきた — あるいは気づかれることすらなかった」。彼らはこの現象を次の格言を引用して説明している。「大洋で最後に発見されるのは魚だ」。

この目的はまた、男の性役割は社会の広範囲にわたってかかわりがあるので、重要である。例えば、女の性役割は、一般的に、男の役割の補完として構成されてきたから、男の性役割における変化は、結果的に、女と女の役割にも影響を与える。また、人に割り当てられる役割とその力との間には、密接な相関関係がある。したがって、男の性役割の研究は、社会における力の分配の研究に加え、被抑圧階級に属する女性や子供および一部の男性に与えられる力の考察も含むことになる。最近、社会で割り当てられてきた役割に不満を表す男性が出てくるようになった。この現象も、非伝統的な役割を望む男性に開かれた新しい可能性と共に、研究される必要がある。最後に、カリキュラムの3番目の目的は、学生が自分自身の生活と社会一般における性役割の影響について意識を高めることである。

2.2 男性学カリキュラムの具体的目標

これらの3つの目的は、いくつかの詳細で明確な達成目標に分けることができる。一般的に、カリキュラムの目標作成は、伝統的な知識の継承と、現代の学生に、特別に必要とされることの両方に留意して行われる。よくあることだが、カリキュラム作成では、一方では学生の特別のニーズと、他方では伝統の哲学的基礎とその理解の必要性との間で衝突が起こる。男性学では、このディレンマは少し違った形で存在する。その理由は、この分野での文献が、マスキュリニティーについて新しく出てきたパラダイムと、自己とその行動をもっと理解したいという男の欲求から生まれた新しい伝統を代表するものだからである。したがって、ディレンマは、教材選択の点で、男とマスキュリニティーの新しい解釈と呼ばれるところのものと、伝統的視点との間の衝突となる。

最後に、カリキュラムの達成目標は、学生の中に期待する変化はどの領域における変化か、理解におけるものか、行動におけるものかも明確にしなければならない。男性学の目的は、理解と行動の両方における変化である。男性学の教師は一般的に、講座を教えるのに2つの方法を取る。男性心理学と行動学を理解することに焦点を絞った研究的視点と、学生の意識と行動の変化を起こすことに焦点を置いた実験的視点である。これらの2つの方法はお互いに相反するものではなく、次に記すように、どちらも取り入

れて講座を構成することができる。

1. 男の特徴としてのマイルネスの意味を定義する。そのためには、男の心理的発達における体の環境に対する関係を研究し、理解しなければならない。さらに、男の心理と行動の研究には、生得的特徴と学習された特徴とを区別する基準を設定しなければならない。このことが、マイルネスの意味を考えるとという理論的なものであるのに対し、次に述べることは、その社会的表現に関するものである。

2. 社会的に構築されたものとしてのマスキュリニティーの概念を定義し、理解する。そのためには、社会におけるジェンダー属性の基礎と、男のジェンダー属性が、個人の必要よりもむしろ社会的必要によって、どのように決定されるかを理解しなければならない。心理学、社会学、人類学の研究者が、マイルネスの概念の変化を研究している。彼らの結論がいつも一致するとは限らないが、性の属性にスポットを当てたということからも、これらの研究は分析され、理解される必要がある。

また、マスキュリニティーが、異なる社会・経済階級の男によって、どのように異なって理解されているのか学ぶ必要がある。さらに、マスキュリニティーの概念の知識を用いて、自分の生活の中で、性の役割を選択するに際して、マスキュリニティーの概念がどのように影響を与えたか、分析する必要がある。

3. 学問領域としての男性学の発展の軌跡をたどり、カリキュラムにおける機能を定義する。男性学は新しい分野なので、その設立の趣旨と、他の学問領域との関連を理解することは重要である。そのためには、男性学が基礎とする哲学的前提を理解し、また、この分野の歴史的発展における重要な出来事を知り、男性学と他の学問との関連性を理解し、他の分野の学習において、男性の偏見の影響を識別できなければならない。

4. マスキュリニティーと男の役割の歴史的発展を理解する。一般に、歴史的な考察能力の習得は重要であり、男らしいと規定されたある行動が、異なる歴史的時代の社会状況からどのように生じてきたか、また、これらのマスキュリニティーの概念の変化の軌跡をたどらなければならない。最後に、自分たちの時代に特有なマスキュリニティーの概念を、過去から継承された概念と新しい概念とを認識しながら、分析する。

5. マスキュリニティーの概念の社会的役割の機能を定義し、男の性役割への割り当てに及ぼす影響を分析すること。この概念の社会的役割は社会を構成する上で重要であり、効果的な方法で機能している。この機能を定義し、マスキュリニティーの概念がどのように男の性役割の義務を決定しているか、また、男の社会化の過程において、家族や学校、軍隊、政府、職場などの社会組織が果たす役割について学習する。その結果、学生は自己の生活を批判的に考えられるようになるだろう。

6. 男の性役割の社会への影響力を理解する。上下階層的な社会構造と、その序列に

従った力の配分を分析する。男は力を握っているので、意識的であろうとなかろうと、力へのアクセスを支配することによって、他の社会集団に割り当てられる役割を決定する。また、異なる社会の役割と異なる社会集団に属する人に、どんな力が付随し、あるいは欠如するか議論する必要がある。

7. 現代社会でどのように男の性役割が変化してきたか、理解する。男の意識を変化させた過去 20 年間の文化的変容に加えて、男の運動を鼓舞した様々な個人的、社会的な動機を理解し、また、男の心理的発達諸理論を、批評する。さらに、男の性役割について学ぶことを通して生じた、自己の役割についての認識や行動における変化を評価することが大切である。

8. 男の体や心の健康を害する性役割の側面を分析する。男の性役割には男性にとって良い面もあるが、一方では健康を害するという悪い面も複雑に混じり合っている。人間の体と心の健康の関連性、男の性役割に対する期待とストレスとの関連性を理解する。さらに、自分か他の男の役割を検討して、体あるいは心の健康にどのような形で有害なのか評価する。

9. 男の性役割の良い面を認め、評価する。現在の男と男の性役割に対する批評は、男を否定的に描いていることがある。男の多くの性質は生産的であるから、この否定的表現は正当ではない。これらの良い所を認めて、その価値を理解する。それによって、男と女のもっと肯定的な役割を創造するために努力する刺激となることが望ましい。

3 男性学カリキュラムの概要

男性学プログラムとして次に提示するものは、個々の講座のリストではなく、むしろ、上で述べた男性学のねらいと具体的目標に沿った中核的分野についてである。これらの分野は主要な課題ごとに組み立てられており、それぞれの分野は、さらに様々な学科においていくつかのコースに分けることができる。ここでは一般的な名称とその分野に含まれるべき主要課題のリストを挙げた。第3部は独自に発展されうる特別課題を示唆し、学生の必要と教師の興味によって内容を決定するとよいであろう。

3.1 中核的分野

第1部: 入門

マイルネスの概念

男性学 — その歴史と発展

歴史的視野におけるマスキュリニティー

第2部: 社会科学への応用

マスキュリニティーの概念の心理学的基礎

社会における男の性役割

第3部: 選択的課題

被抑圧少数民族の男とその労働

同性愛の伝統

男と変化

文学に描かれた男とメイルネス

男の健康と性

男と攻撃性

このカリキュラムは男性学の1つのまとまったプログラムとして、大学の専攻分野として提示されているが、他の形でも応用できる。男性学を理解したいが、専攻分野にはしたくない学生は、それぞれの部門から科目を選んで、第2専攻にすることができる。例えば、社会学の学生は、メイルネスの概念と歴史的視野におけるマスキュリニティー、社会における男の性役割、マスキュリニティーの概念の心理学的基礎等を基礎科目として取り、必要に応じて選択講座を加えればよいだろう。同様に、他専攻の学生は、社会科学の選択科目として取れるだろう。ほとんどの大学では、男性学はすぐには専攻になりそうもないので、当面は、後者の方法が採用されるだろう。

このカリキュラムは学部と大学院を区別せずに考えている。なぜなら、前述された目標とこれらの専門分野は、より高度な教材の習得と研究調査を要求し、適切な資料を選ぶことによって、どのレベルにも設置することができるからである。

3.2 講座概要作成の1例

次に、どのように1つの講座概要を作成できるか説明しよう。

講座名: アメリカにおけるマスキュリニティー

ねらい: この講座は過去3世紀にわたるアメリカの歴史と文化において、マスキュリニティーの概念がどのように変化してきたかを考察する。マスキュリニティーの現代の概念は歴史的な変化であるので、この変化を理解することは重要である。この講座では男性的特性の史的多様性と永続性を探求する。この探求を通して、多くの歴史書に男の偏見があることに気づくであろう。男は歴史を通して支配的な役を演じ、歴史的研究と著作における男の視点が、我々の歴史の解釈に強い影響を与えてきたからである。こ

の講座は、マスキュリニティーの定義に対する社会的要求と期待の影響を説明し、男性学の入門となる。

具体的達成目標: この講座の終了までには、アメリカ合衆国の歴史の諸段階において有力であったマスキュリニティーの特徴を定義し、その変化の軌跡をたどり、どれが男に関する現代の理論にもなお引き継がれているのかを学生は理解できるであろう。また、なぜ、男の特徴の一部は、ある特定の時代に特有のものとしてでなく、むしろ不変なものとして考えられるのか、その理由を議論するべきであろう。さらに、学生は、19世紀から20世紀初頭にかけてのフェミニスト男性の歴史を理解するだろう。最後に、学生は、歴史、つまり重要な出来事と時代区分が、どのように男の偏見から定義されてきたか、また有史以来、社会秩序の男支配を意味する父権主義の概念を説明することができるであろう。

授業内容の概要: 入門部の授業では、プレックによって定義されたアメリカ史の時代区分と、それぞれの異なる時代に優勢であったマスキュリニティーの概念を検討する。特に、現代との関連性において19世紀後半に注目する。次に、男の間での文化と人種の多様性と、それぞれの社会グループでマスキュリニティーがどのように理解されているかを検討する。ここでは、同性愛の男の研究と、過去200年のアメリカ史における彼らに対する態度を含む。そのために、シルビア・ストラウスによるフェミニスト男性の研究と共に、カツの研究を使用するであろう。資料は少ないが、黒人男性の研究を取り上げることも重要であろう。

これを基礎として、第2次世界大戦以降の時代の研究には、バーバラ・アーレンレイクの著作が役に立つ。マスキュリニティーの意味が、男の間でどのように異なって受けとめられているかを理解するために、男の運動の発展とそのいろいろな流れを学ぶことも重要である。ブロードの著作も有益である。

授業での使用文献が、すべて男とマスキュリニティーの新しいパラダイムについて書かれた本なので、学生が、ある時代の伝統的な男性のとらえ方について書かれた資料を検討し、そこにある偏見を批判することは重要なことである。デグラの論文はこの目的のためには役に立つ。

必要文献

Dubbert, Joe L. *A Man's Place*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1979.

Ehrenreich, Barbara. *The Hearts of Men*. Garden City, N.Y.: Anchor Press/Doubleday, 1983.

Filene, Peter Gabriel. *Him/her/self: Sex Roles in Modern America*. New York: Harcourt, Brace, Jovanovich, 1974.

Katz, Jonathan. *Gay American History: Lesbians and Gay Men in the U.S.A.* New York: Thomas Y. Crowell Company, 1976.

Pleck, Elizabeth & Pleck, Joseph. *The American Man*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1980.

参考文献

- Banner, Lois. *American Beauty*. New York: Alfred A Knopf, 1983.
- Barker-Benfield, G. J. *The Horrors of the Half-known Life: Male Attitudes toward Women*. New York: Harper and Row, Publishers, 1976.
- Brod, Harry (Ed.) *The Making of Masculinities*. 1987.
- Davis, Natalie Zemon. "Women's History" in Transition: The European Case. *Feminist Studies*, 1975-1976, 3/4, 83-103.
- Degler, Carl. "What the Women's Movement Has Done to American History." In E. Langland and W. Gove. *A Feminist Perspective in the Academy*. Chicago: The University of Chicago Press, 1981.
- Macleod, David I. *Building Character in the American Boy: The Boys Scouts, YMCA and their Forerunners, 1870-1920*. Madison, WI: The University of Wisconsin Press, 1983.
- Stearns, Peter N. *Be a Man!*. New York: Holmes and Meier Publishers, Inc., 1979.
- Strauss, Sylvia. *Traitors to the Masculine Cause: The Men's Campaign for Women's Rights*. Westport, CT: Greenwood Press, 1982.

4 結論

アメリカ合衆国における男性学は、過去20年間にわたって、着実に成長してきた。「アメリカ男性学会」とその学術雑誌である『男性学レビュー』は、この分野の成長への道を導き、教師たちに、講座を開設し研究を進めるために必要な援助と助言を与えてきた。男性学は、男の性役割の変化が必要であり、必要な変化についての研究と調査のための話し合いの場が必要不可欠であると感じた多くの個人によって、自発的に始められた。このプロセスは、多くの人々の献身的な仕事を通して継続している。現在、カナダ、ドイツ、アイルランド、英国、フランスに、男性学の講座がある。この分野が成長し続け、国際的な学問になることが、我々男性学研究者の希望とするところである。

References

- Bowles, Gloria & Duelli-Klein, Renate, (Eds.) *Theories of Women's Studies*. Boston: Routledge and Kegan Paul, 1983.
- Brod, Harry (Ed.) *The Making of Masculinities: The New Men's Studies*. Boston: Allen & Unwin, 1987.
- Dubbert, Joe L. *A Man's Place*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1979.
- Filene, Peter Gabriel. *Him/her/self: Sex Roles in Modern America*. New York: Harcourt, Brace, Jobanovich, 1974.
- Hearn, Jeff and Morgan, David. *Men, Masculinities and Social Theory*. London: Unwin Hyman, 1990.
- Katz, Jonathan. *Gay American history: Lesbians and Gay Men in the U.S.A.* New York: Thomas Y. Crowell Company, 1976.
- Kaufman, Michael (Ed.). *Beyond Patriarchy: Essays on Pleasure, Power and Change*. Toronto: Oxford University Press, 1987.
- Kuhn, Thomas. S. *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: The University of Chicago Press, 1962.
- Pleck, Elizabeth & Pleck, Joseph. *The American Man*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1980.